

吉井源太と明治

《8》

世界で競争する覚悟を

吉井源太が仕事の集大成として出した「日本製紙論」とは、およそどのような本だろうか。

総論から始まり、世界や土佐の紙の歴史、明治の紙製造業の状況が述べられている。それが九六。

全国各府県の紙生産額の一覧表が続いた後、製造に関することがらが説明されていく。

まずは紙の原料について。草木の良いものを見分ける方法、繊維を取り出すために煮たり、漂白したりする方法が説明される。

次に、実際の紙漉き作業の工程、使われる用具、混ぜられる物の説明が続く。説明文には所々、作業の様子を絵にしたものが、一二ページを使って入っている。文章だけでは伝わりにく

い作業や器具の様子がよく分かる。和紙を漉いていた人、これから漉こうとしていた人にとって大変参考になったと思われる。このような説明がおよそ六十ページにわたって書かれている。

このあとは、伝統的なものや、新しいものなど、当時の代表的な三十七種類の紙が取り上げられ、それぞれの歴史や作り方、用途が簡潔に述べられている。

このうち新しい紙といえるものは十数種で、いずれも源太が開発に多少なりともかかわっている。この説明におよそ二十五ページが使われている。

最後は、原料や混ぜ物に使われる草木の説明になる。付録として、葉や枝、花など各種の絵が三十六枚つけられ、約三十ページにわた

る説明が続く。全部で百四十ページほどだ。

原本の一冊はいの町紙の博物館に展示されているが、貴重なものなので、中を読むにはその後出された復刻本を使うことになる。それほど厚いものではないが、

いが、実際的な価値のある、内容の充実した本だといえる。

源太は、「総論」の最後で、長く作られてきた日本の紙は今、世界の賞賛を受けていると述べている。日本の紙が滑らかで緻

密、また保存性にすぐれている事は世界で抜きん出ているのだから、製紙業者は、大いに世界の市場で競争する覚悟を持つべきだと呼び掛けている。

そのためには、外国人の求めている紙の特徴を察し

て、製法を改良し、また製造費を安くして価格も抑え、質を一定にして海外からの需要を満たすようにしなくてはならないとしている。

しかしここで、日本の和紙製造業者は、小規模であるか、農閑期に副業として紙を漉く場合が多いので、製品が一定し難く、大量製造が困難だという問題が出てくる。このためには、小さな争いをやめ、協力することが必要で、団体を作ること大切だと説いている。

源太の生涯の仕事は、紙の製造方法を開発することにも、各地へ伝え、同時に同業者の協力関係や団体作りをしてきたものだった。

(京大大学院研修員、京都府在住)



御用紙漉きの地、成山の集落 (吾川郡いの町)